

中高一貫教育におけるSSHの取り組みの意義

校長 大谷 尚

本校は、2000（平成12）年に、国立学校唯一の併設型中高一貫校に認定されました。しかし振り返れば、本校はそもそも設立以来60有余年にわたって、いわば併設型中高一貫校的な取り組みを行ってきており、この認定によって、それに明確な枠組みを与えられ、それをいっそう追究できる条件を与えられたとすることができるかもしれません。ただしそのことは同時に、それを課題として与えられたのだということもできると思います。

そしてそのような中、2006（平成18）年に本校はさらに、SSHに指定されました。したがって、本校のSSHの取り組みは、本校のめざす中高一貫教育の研究と実践の基盤の上に、さまざまに実践され、展開されてきました。この点で、本校のSSHの取り組みは、他の一般的なSSH指定校と比べると、変則的に見える点がいくつもあります。このことは、本校がSSHに取り組む際に、またその評価を受ける際に、問題を生じさせる可能性を孕むものです。しかし中高一貫教育は、本校の第一の要件です。そのため本校では、あくまで中高一貫教育の特長を生かしたSSHを模索し、その実現に取り組んできたのです。

その結果、2010年4月7日に文部科学省から発表された「スーパーサイエンスハイスクール（平成18年度指定）の中間評価について」では、「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいを十分達成している」という高い評価を受けることができました。この評価を受けたのは平成18年度指定の31校のうち8校のみであり、大学附属校としても、中高一貫教育校としても、本校1校のみでした。

この結果に、本校教職員は大変強く励まされました。今まで、困難な条件下で、さまざまな工夫によって変則的とも言える取り組みを行ってきたことが、このように評価されたことを、大変嬉しく、光栄に感じましたし、何より、私たちの取り組みが客観的にもこのように評価されたことは、この取り組みによって教育を受ける生徒たちに対しても、その保護者の皆さまに対しても、多少なりとも責任を果たせているという実感を持つことができました。

ところで、では、本校が大切にする中高一貫教育とは、何をめざすものだと言えるでしょうか。このこと

は、これまでの本校のSSHの報告書、研究紀要などに、なんども書かれていることだと思いますが、私のことばであらためて記せば、それは「成長の分断されない見守りの中で、生徒の自主性、主体性をどこまでも育む」ということではないかと考えています。このことを説明するために、ここで、あるエピソードを記すことをお許しください。

ある国際会議で、カリフォルニア大学図書館長であるUC BerkeleyのPeter Lyman教授（惜しくも先年他界されました）が“Digital Libraries in Universities of the Future”と題する講演をしました。同大学は、7つのキャンパスを有しており、それゆえその図書館は全米で最も情報化されていると言われていています。教授の講演のあと、次のような質問が出ました。「あなたの図書館で職員として採用する人は、どんな能力を備えていなければなりませんか？」それに対して教授はこう答えました。「独創力と自己主導性があり、問題発見能力と問題解決能力を有する人です。」この答に質問者は驚き、再度次のようにたずねました。「あなたの図書館は全米で最も情報化された図書館ですね。その図書館職員には、当然、コンピュータに関する能力が必要なのではないですか？ だから私の聞きたいのは、コンピュータに関するどのような能力が必要か？ なのです。」すると教授は、次のように答えました。「私の図書館で採用する人に、コンピュータに関する能力など要求しません。そのような能力は、採用後に身に付けることができるからです。しかし私の上げたこれらの能力がなければ、私の図書館ですべき仕事はありません。」

この物語は中等教育に関するいくつかの重要な示唆を含んでいると思いますが、ここではそのうち2つを取り上げたいと思います。

1つは、「構造的な能力観の必要」です。人間の能力には「中核的な能力」と「周辺的な能力」とがあり、前者が後者を使うのであって、決してその逆ではないということです。そしてこのお話では、情報活用能力は周辺の能力であり、Lyman教授の上げた独創力、自己主導性、問題発見能力、問題解決能力こそが中核的な能力だということになります。

2つめは、「能力獲得の臨界期の認識の必要」です。Lyman教授の答えは、上記の周辺的能力は、成人し職務のためにそれが必要になってからでも身に付けることができるのに対して、中核的能力は、人間の成長や人格の発達とともに発展するものであり、成人してからは身に付けることが極めて困難だということを前提として考えると考えられます。つまり、このような中核的能力には、獲得のための臨界期があるということです。たとえば、絶対音感というものは、3歳から5歳くらいの範囲でないと獲得することができないとされていますが、これが絶対音感の臨界期です。では、上記のような中核的な能力の獲得の臨界期はいつなのでしょう。私は発達心理学者ではありませんが、専門の先生方のお話などをうかがうと、それは思春期の頃だと考えられているようです。そうだとすれば、それはちょうど、中学生と高校生の頃、つまり本校の在学期間の頃だと言えることになります。

振り返って近年の若者や若い社会人についての言説を見れば、さまざまな問題が語られるたびに、「ゆとり教育の弊害のため」とされることが多いように思います。それが当たっているのかどうかについて、私は何もエビデンスを持っていません。しかし大学教員として大学生を見てみると、ゆとり教育よりも、センター試験最重視の、受験学力獲得を最優先とした学習指導と生活指導の影響ではないかと思える点が多々あります。中学生は、より学力の高い高校に入学することを目標として、高校生は、センター試験でより高い得点を取ることを目標として、その学習活動と生活のすべてが整えられているように思います。「やりたいことがあっても今はやるな。読みたい本があっても今は読むな。なにか問題を感じても今はそれについて考えるな。受験のことだけを考えろ。それらはすべて、大学に入ってからやればいいのだ。」現在の中高生たちは、多かれ少なかれ、学校と家庭で、そのような指導と圧力を受けて、すべてを先延ばしにさせられます。その間、独創力も自己主導性も発揮してはいけません。また、何かがおかしいと感じる問題発見能力も、それを解決しようとする問題解決能力も、発揮してはいけません。そして、かれらは、そのようにして、大学に入ってきます。

では、大学に入ってから、それらが獲得でき、それらを発揮できるのか？ 答えは否です。その理由は簡単です。もう、臨界期を過ぎてからです。これは私の大学教員としての深い実感です。つまり、受験学力重視の教育体制は、子どもたちに大学に入学するための学力を与えることと引き替えに、かれらから、大切なものを獲得する機会を奪っているのだと、私は考えています。

本校が目指すのは、この反対を行うことです。彼らには、本校在学中に、独創力も自己主導性も最大限に発揮してもらいたいと考えています。また、何かがおかしいと感じる問題発見能力も、それを解決しようとする問題解決能力も、最大限に発揮してもらいたいと考えています。そのような学習環境を生徒たちのために組織するのが、本校の役割だと考えているのです。

したがって本校のSSHも、当然、そのようなものになっています。既存の科学技術の体系を教えるのみではなく、科学技術について、自分たちの頭で考える力を生徒たちが獲得できるようにするのが、本校のSSHの方向性です。科学技術には、歴史的に見ても、人間にとってすばらしい役割を果たしてきた面と、残酷な働きをしてきた面とがあります。その両者を理解し、自分たち自身が、科学を主体的に捉え、未来の社会のために再構成し、生かして行くことのできる人間になるための、独創性と自己主導性と問題発見能力と問題解決能力とを、このSSHを通して、生徒たちにはぜひ獲得して欲しいと、心から願っています。

さて、本報告書は、本校におけるSSHの第1期の最終年度の取り組みについてまとめたものです。ここに記した取り組みには、本校のもう一つの重要な取り組みである高大連携に基づくものが数多く含まれています。そのような取り組みに関わって下さった、名大をはじめとする諸大学のたくさんの先生方をはじめ、日頃から本校のSSHの取り組みにご指導、ご支援を下さっているすべての皆さまに感謝を込めて、本報告書をお手元にお届け致します。これからもどうぞ、これまでと変わらぬ忌憚のないご意見、ご批判、また強力なご指導を頂戴できれば、誠に幸いに存じます。